

進之候

(畠山義總が十二月廿日附の書狀は前に之を出せり)

【栗棘庵文書】 山城

二二三三

貴札拜見、畏悦之至候。仍青銅貳十疋被懸御意候。御懇情不知所謝候。爰元之儀、委曲御使僧可有御演説候。將亦雖輕微至極候。孔方三拾疋令進覽之候。表輕志計候。恐々頓首。

卯月十九日

續 光 在判

栗棘庵

尊答

(上書)

栗棘庵

遊佐美作守

續 光

尊答

【栗棘庵文書】

二二三三

貴札拜閱、本望之至候。仍五明被懸御意候。芳情快然此

事候。就中雖乏少至極候。青銅貳十疋令進入候。表嘉儀計候。尙明春可申談候間、不能詳候。恐々謹言。

極月十七日

綱 光 在判

栗棘庵

貴報

(上書)

栗棘庵

遊佐四郎右衛門尉

綱 光

貴報

【栗棘庵文書】

二二三三

尙々二郎衛門尉長々相留申事候。迷惑至候。併依錯亂如此候。乍去涯分申付、如在申間敷候。委細御使被上候境節、具ニ可申入候。

先度者御懇書、祝着之至候。御使次郎左衛門尉、長々爲致在國候義、于今無如在候。當國錯亂ニ付而延引之事候。然者寺納者如何様共可致馳走依覺悟相留申候。乍去涯分馳走仕、近日登可申心中迄候。委曲之段、尙以鈞山軒へ

申入候間、不能詳候。恐々謹言。

霜月廿三日

光 宗 在判

栗棘庵

參 貴報

(上書)

栗棘庵

溫井下總守

光 宗

參 貴報

【栗棘庵文書】

二二三三

猶々雖左道之至候、嶋海苔壹箱進覽候。何事ニても相當之用蒙仰、可致奉公候。

述首座令上途候條、爰許之義具可有御申候。去々年之冬之時分より、志津良之義余人ニ代官職被申付候。雖然述首座申合、先例之趣種々申分、可相拘由申候處、同名彦五郎七月廿三日ニ打死仕候。就其彼子若松丸ニ被申付候。其砌も相拘、御寺へ直務候様ニ与種々致調法候へ共、堅被申付候間不及是非候。拙者無如在通、委細述首座

可有御存知候。已去年之春之時分、彼在所無御知行上者、御逗留無曲由候て、述首座被上候お、抑留申候て種々迴調法候へ共無曲候。乍去年貢等如先規不可有相違候由、堅被申出候條先以可然候。猶具述首座可有御申候間、不能詳候。恐々謹言。

四月十二日

孝 宗 在判

栗棘庵

侍者御中

(上書)

栗棘庵

溫井備中守

孝 宗

御侍者中

【栗棘庵文書】

二二三三

御懇書過當之至候。如仰新春之嘉瑞、無申計存候。仍鳥目廿疋被懸御意候。目出致拜領候。將亦七浦儀、于今不相渡候。無曲存候。青銅廿疋被參候。御叡花迄候。恐々謹言。